

『大帝国論』の一考察

皇學館大學助手

松浦光修

はじめに

『大帝国論』は、幕末維新期の三河国の国学者・竹尾正胤（天保四〔一八三三〕年—明治七〔一八七四〕年）が、文久三年一二月、三一歳の時に著した書である。この書は、戦前より、「幕末に於ける国学の顕著な一傾向を示す書物」、「此方面に於いて類書の割合にすぎないもの」などと評価され、河野省三氏著『平田篤胤¹⁾』に、その全文が翻刻されているが、戦後も、「国学者の洋学観、世界観を示すものとしてきわめて重大な書」として、芳賀登氏・松本三之介氏校注の『国学運動の思想²⁾』に、再び全文が翻刻され、現在では、学界一般に広く知られている。しかし、その思想上の重要性が、早くから指摘されている割には、その思想内容の分析や検討は、今日に至っても、大きくは進展していない。よって、本稿では、『大帝国論』の思想的な構造と、その背景との客観的な分析を試み、もって、幕末国学の思想的な展開の一端を、具体的に明らかにしたいと思う。

「大帝国論」は、「西夷等が帝国と称する国」(四九〇)「前掲『国学運動の思想』四九〇頁を意味する。以下、これに準じる。)、すなわち「皇国・支那」「独逸・都兎格・魯西亞・仏蘭西」(同前)の計六国の中で、日本以外は、すべて「私に僭称せる偽帝国」(同前)である、と主張した書である。その執筆の動機を簡単にいえば、「通商条約以後の西洋諸国の来航の増加、接触の深化によるその強大さの認識・危機感、西洋を肯定する洋学および洋学者の盛行」ということになる。

ただし、この書の巻頭部分には、その動機が、より詳細かつ具体的に記されている。それは、この書の全体的な性格を把握する上でも、重要な部分であると思われるので、まず、その記事内容を紹介しておこう。

「正胤は、以下のように記している。洋学者達は、「事も物も、歐邏巴は勝たる国と信服」(四九一・句読点は筆者。以下、これに準じる。)しており、その様は、あたかも「彼儒学者等が漢土を中華・中国、或聖賢首出国と尊敬するが如く」(同前)である。そして、洋学者達は、「其酋長を、皇帝・天子と尊崇し、吾が天皇命を、畏くも其西夷等が酋長と同等」(同前・闕字は省略。以下、これに準じる。)と考えているから、今後は、国学者達が、従来のように「わが天皇命は一地球の総帝」(同前)と誇っていると、「日本のみ豈伝統の帝国ならむや。独逸帝は、西洋紀元以前より在る所にて、歴代堂々たる帝国なり。日本争かひとり全世界の帝国ならむ。」(同前)と、反論される事態も予想される。ところが、従来の国学者達は、「漢土の王統正しからざる事までは、普く心得ためれど、洋夷が王統に、其論を及せる者は聞ず。」(同前)という状況であるから、それでは、「其に困ずる者」(四九二)も出てくるに違いない。そこで、西洋の各帝国の実態を、「番に研究」(同前)し、「他の国々の王統、はた賤劣なる事」(同前)を証明するとともに、外国にも、「天皇命は、則一地球上の大君主に大座坐し、天朝は、則全世界の大帝国たる事を」(同前)知ら

しめたい、これが。「此書を著さではえあらぬ所以」(同前)である。

以上、要するに、正胤は、従来の国学者の日本を絶対とする世界観が、漢土のみを比較の対象としつつ主張されてきたものであるために、西洋の事例をもって、その世界観を批判されれば、一瞬にして、それが崩壊するのではないかという危機を感じ、それが、この書を執筆する直接的な動機となった、というのである。幕末期に至って、国学者の世界観は、再構築の必要に迫られており、そのような時代的な課題に敏感に応じたのが、この『大帝国論』であったといえよう。

この書が、正胤の著書の中では、最も広く流布し、平田鏗胤、草鹿砥宣隆などからも称賛されているのは、その後、そのような幕末期の思想的状況が存在したからに違いないが、それでは、正胤は、「他の国々の王統」の「賤劣なる事」を、具体的には、どのようにして証明しようとするのであろうか。次に、その方法を検討しつつ、この書の論理構造を明らかにしてみよう。

まず、正胤は、国家にも等級があり、その最上のものが「帝国」であり、その下位に「王侯、共和政治等の国」(四九〇)があるとし、この等級は、イギリスが「近年万国に縦横して、兵威甚盛なりと云ども、未帝号を云す」(同前)という事実からも、軍事力の優劣などとは無関係なものである、としている。それでは、その等級を決定する基準とは、何であろうか。

『大帝国論』では、日本を除く五つの国の「帝国」としての資格が、順を追って個別に検討されているが、その検討を開始するにあたり、正胤は、「いづれも正統の帝国而已にて、更に間然する所なき国なるか」(四九一)という問題を提起している。このことから、正胤は「正統」という一点を基準にして、「帝国」の資格を問うていくことが知られる。

そのような正胤の意識は、『大帝国論』全体の構成にも反映している。この書の特徴の一つとして、日本を除く五

つの帝国の中で、「独逸」に関する文章量が、他の国と比較すると、特に多いことが挙げられる。各帝国の検討に費やされている文章の量を、行数に換算して示すと、およそ次のようになる。⁽⁵⁾

○「支那」…二二(五〇八一—五〇九) ○「独逸」…一八四(四九二—五〇二) ○「都児格」…一九(五〇二—五〇三) ○「魯西亜」…四三(五〇三—五〇五) ○「仏蘭西」…二七(五〇五—五〇七)
実に全体の約六二%が、「独逸」一国の検討に割かれていることになる。

なぜ正胤が、それほど「独逸」に拘泥しているのかといえば、それは、「西洋籍に、此国王を、古より欧邏巴中、正統の帝と」(五〇二) しているからである。したがって、この書の中で、正胤は、五つの「帝国」のすべてについて、個別の検討を加えてはいるものの、その最も重要な目的は、「独逸」一国の検討にあったといっても、過言ではない。

それでは、正胤が、「帝国」の資格を検討する基準としている「正統」とは、具体的には、どのような内容をもつ概念なのであろうか。正胤は、神話の時代にさかのぼって、「独逸」の歴史の検討を行っており、その中に、「斯で、此処に第一云ふ事あり」(四九三) として、次のような記事がある。

此亜当と云ふ者、則、西洋地方の王祖たりと雖も、所謂蠢民にして、仏に衆生と云ふ者なり。然れば、仮令、亜当より歴世相続きし酋長ありとも、其祖宗たる者、蠢化の民なれば、天地を鎔造なし給へる皇神より、連綿と栄え座せる天津日嗣の大御上にかけても、比し奉る可きものに匪ず。況て、彼地の酋長共は、其亜当より无窮に続ける王統さへ、且てあらざれば也。(四九三—四)

これは、おそらく、正胤の「正統」の概念の内容を、最も特徴的に示している記事であろう。正胤は、第一に、「西洋地方の王祖」の「亜当」が、神の子孫ではないこと、すなわち神と「王祖」との不連続を指摘し、第二に、「王祖」の「亜当」の子孫が現在の「酋長」ではないこと、すなわち「王祖」と現在の君主との不連続を指摘し、これら

を批判している。つまり、正胤は、神と各地方最古の君主、さらに、その最古の君主と現在の君主との、血統的な連続性がなければ、「正統」とは認めないのである。このような「正統」の基準によれば、「西洋古来より、欧邏巴全洲の帝国と称し來たる独逸国」(四九二)も、「不正の王統」(五〇二)ということになる。そして、以下、この書においては、残る四つの「帝国」も、「正統」でないことを根拠に、次々と、「帝国」としての資格を否定されていき、「かの外夷の五帝国は、悉に僭称の号」(五一三)、それらの国に比して、日本は「真天子の宮敷給へる」(五一二)、「誠の帝国」(五一四)と結論される。国学的な世界観の再構築という時代の課題に対して、正胤は、以上のような方法によって、一応の解答を示したわけである。

二

正胤は、現在、学界一般には、「平田派」の国学者と認識されている。正胤の祖父・正頼は、平田篤胤と直接の交渉があり、父・正寛は、岡崎地域の最初の篤胤への入門者であり、また、正胤自身も、二〇歳の時の著書『非葛花弁』⁽⁶⁾(嘉永五年)の中で、篤胤を「先師」と記しているので、その見解は、ほぼ妥当なものといえよう。⁽⁷⁾

ただし、篤胤の門人帳に正胤の名前は見えないから、正胤を篤胤の「門下」とするのは誤りである。⁽⁸⁾正胤が、なぜ篤胤に正式な入門をしなかったのかは不明であるが、正胤は、晩年に至るまで、平田門下と密接な関係を保っている⁽⁹⁾ので、ともあれ、その学問思想が、終生、篤胤の学問思想の影響圏内にあったことは、確かであろう。

そこで、以下、『大帝国論』における思想的背景の検討を進めるにあたり、まず、篤胤の学問思想の影響から、検討をはじめたい。篤胤の影響として、第一に考えられるのは、いわば「天皇大君論」ともいべき思想である。

篤胤は、「我が皇大御国は、万国の本つ御柱たる御国(中略)我が天皇は、万国の大君に坐す」⁽¹⁰⁾、また「この大日本は、万国の本国、祖国で、其の上に、わが天皇様は、(中略)万国の御大君に御坐し」⁽¹¹⁾と記している。正胤の『非葛

花弁』にも、「皇大御国は、天下にあらゆる千万国の本津大皇国」、「世界万国の総王とまします天皇命」などがあるが、これは、篤胤の思想を、そのまま継承したものであろう。これが、天皇を、「惣天皇」(五一二・五一三)、「惣君主」(五一三)、「一天四海の大君」(五二六)などとするような『大帝國論』の基本的な思想へと、発展的に継承されていることは、容易に推測できるところである。ただし、「帝國」という概念の摂取と、その思想的な応用とは、篤胤の学問思想には、いまだ顕在化していないから、それ以後の学者・思想家の影響を考えるべきであらう。

篤胤の学問思想の影響として、第二に考えられるのは、洋学摂取の姿勢についてである。ここでは、いわゆる交易無用論を素材として、その問題を検討してみよう。

『大帝國論』には、「皇国にては(中略) 国用足らざる事一つだに无が中にも、米穀の勝れて美味なるは、万邦更に及ぶ所無し。」(五二〇)とあり、また、「わが皇国、(中略) 造化の神等の神慮もて、他邦の産物は貸らでも、国用満足りて、人烟稠密に、百菓百物を生ぜしめ給へるもの也。」(五二二)とある。¹⁴ これらの交易無用論は、これ以前の正胤の著述にも、しばしば記されており、例えば、『非葛花弁』¹³には、「皇国は、万国の本祖国なるが故に、万物満足」とあり、同書の付録で、父・正寛との共著『非葛花弁付録』¹³(嘉永五年)にも、次のようにある。

我皇大御国は、万国の宗祖国たるによりて、米の美しきを始め、万満たれるは、風土のすぐれたるいはれにして、諸蕃夷に比類ある事なし、かかれば異国の如く他国に往来交易といふ業¹⁴をして、おのが国の足らざるを助くる国風とは甚く違へり。

『非葛花弁』より『大帝國論』に至る、このような正胤の交易無用論は、篤胤の見解を、そのまま継承しているものであろう。

篤胤は、『古道大意』の中で、「日本ガ外国ト交ハラヌ訣¹⁵」を、西洋人は、次のように述べている、と記している。

先、日本国ノ歎バシク羨マシイ事ハ、異国ノ人ト交易センデモ、トント困ル事ガナイ。ソリヤドウジャト云フニ、

マヅ地勢が有福デ、外国ノ産物ヲ、取寄ズトモ宜イカラノ事ジャ。又、我エウロツバ諸国ノ者ドモノ、外国アル
キラシテ、交易ヲ専トスル事ハ、一体物ガ足ラヌカラノ事ジャ。⁽¹⁶⁾

右の記事で、篤胤が依拠しているのは、『日本志（鎖国論）』であるが、この『古道大意』に限っても、他に『華夷通
商考』、『日本水土考』、『天経或門』、『増訳采覧異言』などの洋学関係書の書名が見える。『大帝国論』には、夥しい
数の洋学関係書が参考にされているが、そのような洋学の積極的な摂取を行う姿勢自体に、篤胤の影響を見ることがも
できよう。

篤胤の学問思想の全体像については、正胤が二五歳の時に著した『魯叟孔丘弁』⁽¹⁷⁾（安政四年）に、次のようにある。

先師（篤胤をいう）は、皇朝の大道を教示^ヲ示らるる、其本は、鈴屋翁の門に出られたりといへど、其説は師の鈴屋
翁より委曲に、儒仏の書どもの奥を究めて、皇国の万国の祖国たるいはれを、書に著し世に示され、天文・地
理・曆・西洋学をさへに通達せられて、其学の博き事、古今にたくひなく、著述の富める事、千歳の一人（後略）
正胤は、多方面に渡る篤胤の学問的な業績の中で、「皇国の万国の祖国たるいはれ」を示したことと、「天文・地
理・曆・西洋学をさへに通達」していたこととの二点を、主に評価している。これは、換言すると、正胤が、篤胤の
学問思想の中から、主にその二つの点を継承していることを、暗示する記事でもあろう。すなわち、正胤は、篤胤の
学問思想からは、天皇大君論と積極的な洋学摂取の姿勢とに、最も強い影響を受けており、『大帝国論』にも、その影
響は、強く見られるのである。

ただし、先にも述べたように、篤胤の天皇大君論と、それを継承している正胤の『非葛花弁』の主張とは、いま
だ「帝国」という概念は顕在化していない。この概念は何に由来するのか、次に検討しよう。

国家にも等級があり、その最上の等級が「帝国」である、などという考え方は、古くは、新井白石の『采覧異言』・『西洋紀聞』などにも見えており、本来は洋字に由来するものである。⁽¹⁸⁾その後も、この概念は、『鎖国論』、『訂正増訳・采覧異言』、『西洋列国史略』などで繰り返し紹介されているので、当時の知識人達には、よく知られていたものと思われる。しかし、正胤が、『大帝国論』を著すにあたって、その概念を、直接に洋学関係書から摂取したとは考えにくい。正胤以前に、従来の天皇大君論をもととして、「帝国」の概念を摂取し、「天皇総帝論」ともいうべき理論を形成した国学者が、すでに存在するからである。

大國隆正は、『馭戎問答』（安政二年）に、次のように記している。

今、西洋地方にて、諸國の位をたて、帝國・王国・侯國といふ時、わが日本國を、その帝國のうちにかぞえていはるるよし。わがおもふ所は、そのたてかた、いまだ天地の真にかなはざるべし。外の帝爵のくにに、太古より帝王のかはらぬくに、あらばこそあらめ、わが日本國をぬき出し、大帝爵の國と定むべきものになんある。⁽¹⁹⁾君主の血統的な連続性をもって、日本と他の諸帝國との相違を主張している点、正胤の主張と、ほぼ同一である。

また、「帝国」の具体的な国名について、隆正は、『本学拳要』（安政二年）の中で、「西洋にて、いま、帝爵、王爵、侯爵と、くにの位をたてていふなかに、わが日本は、第一等帝爵のうちにかぞへられてあることなり。支那、魯西亜、独逸・都児格、これら同じ帝爵のくになら⁽²⁰⁾と記している。「皇國・支那」「独逸・都児格・魯西亜・仏蘭西」（四九〇）を挙げている『大帝国論』と比べると、「仏蘭西」が欠落しているが、『大帝国論』の初稿本である『天朝大帝国論稿』⁽²¹⁾（文久元年）にも「仏蘭西」がなく、安政二年の隆正と、文久元年の正胤とは、「帝国」の具体的な国名の認識についても、一致していたことが知られる。

さらに、『大帝国論』には、他にも隆正の学問思想の影響と思われる部分がある。同書には、「神勅万古に貫き、今の世に至る迄、御世は百二十余代、年は五千余歳」（五一二）、また、「天孫降臨以来、今に至りて、五千有余歳」（五

二八) などとあり、『国学運動の思想』では、後者の記事の頭注に、「この典拠は不詳」と記されている。なるほど、この紀年法は、篤胤のものではない。『大帝国論』にも引用されている篤胤の『弘仁曆運記考』は、「天降より、神武天皇元年辛酉の前年まで二千四百一年にて、(中略) 其元年より、是天保四年に至りて二千四百九十三年なれば、其を合せては、天孫降臨より、四千八百九十四年⁽²²⁾とするもので、この紀年法にしたがえば、天孫降臨より、『天朝大帝国論稿』の文久元年までは四九二二年、『大帝国論』の文久三年までは四九二四年であり、「五千有余歳」には、若干不足する。

そこで、隆正の紀年法を見てみると、『馭戎問答』には、「神武天皇の日向をたち出たまへる甲寅の年より、二千四百七十六年以前を、瓊瓊杵尊即位元年と定むべきなり⁽²³⁾」とある。「瓊瓊杵尊即位元年」から、「甲寅の年」までが二四七六年、「甲寅の年」の翌年から、神武天皇即位の年とされる辛酉の年までは七年、辛酉の年の翌年から、文久元年までならば、二五二〇年で計五〇〇三年となり、文久三年までならば、二五二二年で計五〇〇五年となる。すなわち、いずれも「五千有余歳」であり、よって、『大帝国論』が、隆正の紀年法を採用していることは、ほぼ間違いない。なお、正胤が、隆正の記年法を知っていたことは、『神威鑿狄考』⁽²⁴⁾(文久三年四月)に、『馭戎問答』の書名が見えるので、確実である。

隆正は、安政二年二月、三河を訪れて四泊し、その折り、『馭戎問答』の講釈も行っており、また、隆正は、同四年九月にも、三河を訪れて二三泊⁽²⁵⁾している。正胤が隆正と接触したのは、その折りのことである。『魯叟孔丘弁』には、「野々口隆正、今年、わがもとを訪へる節」とある。正胤が、隆正から何らかの影響を受けていたとしても、不思議ではない。

ただし、同じ天皇総帝論でも、隆正のものと、正胤のものとは、その論理に相違がある。隆正の天皇総帝論は、日本以外の帝国の存在を認めつつ、その上位に日本を位置づけ「大帝爵の国」とするものであるが、正胤の天皇総帝

論は、日本以外の国の帝国としての資格を否定して「偽帝国」とし、日本のみを唯一の「真帝国」(五九一・五二八)「実の帝国」(四九六)などとするものであり、隆正の理論を、いわば現状肯定の天皇総帝論とすれば、正胤の理論は、いわば現状否定の天皇総帝論ということになる。もともと、正胤の理論によれば、日本以外に帝国というものは存在しないのであるから、それは、天皇総帝論というよりも、天皇唯帝論とでもいう方が正確なのかもしれない。しかし、『大帝国論』には、その書名をはじめ、「天朝は、則全世界の大帝国」(四九二)などという、隆正と同じ理論に基づいているかのような表現も、一部には混在している。

よって、ここでは、とりあえず正胤の理論も、天皇総帝論の範疇にあるものとしておこう。要するに、『大帝国論』全体には、論理的に、なお十分に整理されていないと思われる部分も、残されているのである。

さて、同じように「帝国」の概念を主要な要素としながら、なぜ正胤と隆正との理論は、そのような相違を生じたのであろうか。次に、その原因を検討してみよう。

四

会沢正志齋の『新論』は、後期水戸学を代表する著述であるが、その「形成篇」には、次のようにある。

或称曰_二垂細垂弗利加欧邏巴_一者、西夷所_二私呼_一、而非_二宇内之公名_一、且非_二天朝所_一命之名_一、故今不_レ言_。(26)

『大帝国論』には、「偕、五大洲の名目、今は公然と世に称せれども、水戸の会沢伯民は、『西夷ガ私ニ呼所ニテ、宇内ノ公名ニ非ズ。亦天朝ノ命ズル所ニ非ズ。故之ヲ取ず。』と云り」(四九〇)とあるが、これは、右の記事を引用しているであろう。また、それに続けて、「是は、実に尤なる語なり。」(同前)、「道の大本たる顕幽无敵の本教を学む者は、かかる事にも深く心を用ふ可きものになむ。」(同前)なども記されている。正胤が、『新論』を参考にしていること、そして、その見解に共鳴もしていることは、以上、明らかであろう。

『新論』の「形成篇」には、その他にも、『大帝国論』との関係の上で、次のような注目すべき記事がある。

蘭学家謂前数国之王為帝、即西夷所稱奚瑟爾者、原出於羅馬先祖之名。蘭学家訳為帝者、特假漢字以分尊卑之等耳。其实則非我所謂帝之義、故今不用帝国等之字也。⁽²⁷⁾

「蘭学家」のいう「帝」は「非我所謂帝之義」とし、「故今不用帝国等之字也」とする正志斎の理論は、日本以外の国は「偽帝国」であるとし、「帝とは僭号なるをもて、今、酋長と書るなり。」（四九二）とする正胤の理論と、ほぼ同一であるといえよう。いわば現状否定の天皇総帝論という点で、正志斎と正胤との理論は一致しており、ここに、正胤における、水戸学的な正名論の影響を見ることができよう。⁽²⁸⁾ 先の正胤と隆正との理論的な相違も、その原因は、ここにあるのかもしれない。

また、『大帝国論』は、独逸について、「歐邏巴地方にてこそ、正統の帝と云ひ、其酋長を、天子・皇帝とも云はば云はめ、真天子のまし坐す此大皇国人、其に效ひて、しか尊称する由の有らめやも。」（五〇二）としているが、『新論』の「形成篇」にも、「熱馬ゼルマ（独逸をいう）自西洋諸蕃視之、則有似東周之勢者。然自宇内大觀之、則非有宗周之尊。」⁽²⁹⁾と、ほぼ同趣旨の見解が示されている。『大帝国論』の主目的が、独逸の検討にあつたことは先に述べたが、『新論』にも、「西洋皆奉邏馬法、（中略）而熱馬ゼルマ為之祖」⁽³⁰⁾とあり、このような認識も、『大帝国論』に何らかの影響を与えているに違いない。

『大帝国論』には、他にも水戸学からの影響と思われる部分がある。以下は、思想的な影響というよりも、技術的な影響といった方がよいかろう。

初稿本の『天朝大帝国論稿』と、再訂本の同書との間には、いくつかの相違点が見られる。その一つが、初稿本には、各条文末の参考書名の注書がなく、再訂本には、すべての条文中にわたって、それが施されているということである。

再訂の約八か月前に成立している『神威鑿狄考』には、この変化について、次のような注意すべき記事がある。

彼の『元寇紀略』巻首に引用書目を出しながら、本条に至りて、何れもて出処をしるさざるは、鹿漏と云ふべし。『日本外史』など此類にて、証書と為るに足らず。(中略)是に引かへて、『大日本史』・『皇朝史略』・『関城釋史』などには、各其箇条ごとに出所の書名を加へたれば、実に、考証となるべき書にぞありける。「紀略」・「外史」の如く、首卷にかばかり引書を目録をしるしたりとも、本文の条毎に、其出所の書名を出さずしては、普通の読本・軍記類と、やがて同一一致になりぬべくなむ。

正胤は、再訂にあたって、おそらく「証書」としての体裁を整えるため、水戸学派の史書にならって、「本文の条毎に、其出所の書名」を記したのであろう。

ちなみに、三河の平田派の学者達は、幕末の政治状況 おける徳川齊昭の活躍に期待するところが、大きかったようである。羽田野敬雄・竹尾正頼(正胤の祖父)、三宅重武(正胤の弟)、そして正胤は、万延元年八月の齊昭の死を悼み、それぞれ追悼の和歌を詠んでいる。⁽³¹⁾

五

水戸の史書の影響を受けて、『大帝国論』には、「本文の条毎に、其出所の書名」が記されているわけであるが、その中から、洋学関係の書名を摘録してみると、次のようになる。⁽³²⁾

○『訂正増訳・采覧異言』(『万国伝信紀事』・『万国航海図説』を含む) ○『西洋列国史略』 ○『坤輿図識』 ○『坤輿図識補』 ○『新撰年表』 ○『洋外通覽』 ○『洋外紀略』 ○『西洋全史』 ○『地球説略』 ○『英国史』 ○『魯西亜志』 ○『一夕夜話』

このように多くの洋学関係書を被見するのは、当時、一般的には困難なことであろう。芳賀登氏が、『大帝国論』の

執筆は「羽田野文庫の恩恵によるところが大であつた」⁽³³⁾と記されているのは、おそらく、そういう事情を勘案しての推測と思われる。

しかし、その芳賀氏の見解を批判して、田崎哲郎氏は、「多くは正輶の蒐集書によつていたとみた方が可であらう」⁽³⁴⁾と記されている。その根拠として、田崎氏は、正輶が、三河地方の西洋通として知られていること、竹尾家の蔵書も、羽田野敬雄、村上忠順などのものと遜色がないこと、などの事実を指摘されており、それらの事実から判断する限り、田崎氏の見解の方が、より妥当かと思われる。

それでは、正胤の祖父・正輶は、いかなる思想を背景として、洋学を摂取していたのであろうか。伊東多三郎氏が、それを端的に示す史料を、かつて論文中に引用されている⁽³⁵⁾。それは、正輶の著書『祭事冤論』⁽³⁶⁾（文化一四年）のこの部分である。

近代、西洋ノ学トテ、天地ノ理ヲ奇妙マデニ考究タル由ニテ、種々ノ測量ノ器モテ、天地渾円ナル道理ヨリシテ、日月五星ノ真形、或ハ、其大小・高卑、交食ノ分数ナド、又土ト云星ノ上ニモ、ナホ八十年ニ一周天スル星ナリトカ云テ、イトイト深切ニ、其理ヲ測量出タルハ、彼聖人モ仏子モ、イマダ得サトリシラザル限ノ事ドモニテ、世ニ奇ナル功ナリ。

「聖人」や「仏子」に優越するものとして、正輶の洋学に対する評価は高い。

ただし、伊東氏は省略されているが、正輶は、右の記事に続けて、「然ハアレド、是將、人間ノ智量ノ傑タルマデノ事ニテ、実ニ根本ハ、イカナル子細モテ、カカル奇モノゾトハ、猶思議了解ベキニ非ズ。」と、洋学への批判も記している。この点、正輶も、当時の一般の国学者達と同じように、洋学を、全面的に評価していたわけではないが、ともあれ、正輶に見られる、洋学に対する高い評価と強い対抗意識とは、『大帝国論』の思想的な背景として、注意しておくべきものの一つであらう。

なお、かつて岸野俊彦氏は、『大帝国論』の思想的な性格について、「従来の平田派的な『万国総帝説』を、開港以後の知識をとり入れながら再構成しようとしたものと記しておられるが、この見解は、以下の点で訂正を要するものである。第一に、「万国総帝説」は、帝国という概念を主要な要素としている以上、篤胤的というよりは、隆正的な主張であると思われること、第二に、『大帝国論』に見られる西洋に関する知識は、「開港以後」に撰取されたものではなく、正頼以来の蓄積に基づいていると思われること、などの点である。後者について付言すれば、嘉永五年の正寛と正胤との共著『非葛花弁付録』には、『鎖国論（日本志）』や『坤輿図識補』の書名が見え、同年の正胤の『非葛花弁』にも、『采覧異言』や『訂正増訳・采覧異言』などの書名が見える。正頼より正胤に至る竹尾家の洋学撰取の背景としては、先の正胤個人の場合と同じく、篤胤の影響を考えておくのが、まず妥当であろう。

ところで、現在、正胤には『大帝国論』の他にも、『西蕃沿革攷』という西洋史に関する著述がある、とする説がある。例えば、田崎氏は、「本書（『大帝国論』をいう）以前に、正胤には『西蕃沿革考』と題する西洋列国の歴史についての書抜がある旨文中に出ている。」⁽³⁸⁾と記されている。しかし、『西蕃沿革考』という書が、西洋史の書であると判断できるような記事は、この書の本文中には、何ら見出せない。これは、おそらく『国学運動の思想』の芳賀氏の頭注を参考にされたのであろう。

その頭注で、芳賀氏は、『西蕃沿革攷』とは、「竹尾正胤が諸書より西洋列国の沿革をしらべ抜書して一本にまとめた書。『西洋列国史略』などを参考にしている。」⁽³⁹⁾と記されている。筆者は、その書の所在は、ついに確認できなかつたので、もしも、芳賀氏が、その所在を確認され、それを披見された上で、そのように記されているのであれば何の問題もない。ところが、正胤の他の著述にも、『西蕃沿革攷』の書名は時折見られ、それらの記事から推定される『西蕃沿革攷』の内容と、芳賀氏の頭注の内容とは、大きく相違するのである。例えば、『魯叟孔丘弁』には、「扨、唐土にて、君を軽しめ、親を重みする事は、『玉かつま学梯』・『西蕃沿革攷』にかつかつ云ひ、「堯代、舜時など

ことごとしく云れども、彼が世にも種々の乱れ有りしをも、思ひ合すべし。是らの事は『西蕃沿革攷』にしるせり。などとある。

それらの記事によるかぎり、『西蕃沿革攷』は、漢土の歴史について記している書ではないか、という疑問が生ぜざるをえない。また、次に記すのは、『大帝国論』の中で、『西蕃沿革攷』の書名が見える記事であるが、これも、漢土の歴史に関する部分の中にある。

此の国風の悪き事は、既に先輩の論弁なし置ける書、許多有り。つきて見るべし。(注書略) 又、歴代沿革の事
実も、中々爰には尽しし。是は、『西蕃沿革攷』と云ふ書に、巨細に論弁ふ可し。(五〇九)

さらに、正胤が、「西蕃」という語を漢土の意味で用いていることは、『魯叟孔丘弁』の中で、「西蕃」の語に、「カラ」という振仮名が記されていることから、明らかである。

以上の点から推測すれば、『西蕃沿革攷』とは、西洋の歴史を記した書ではなく、漢土の歴史を記した書である可能性が高い⁴⁰。しかし、先にも述べたように、筆者は、その書の所在を確認していないので、今は、以上の事実を指摘するに止め、今後の調査検討の進展を期待したいと思う。

ちなみに、正胤は、西洋の学問思想に対する批判書は、執筆する予定であったらしい。『神威麤狄考』には、次のようにある。

吾が生国の神明を聞き、ひたすら夷狄が語に效ひて、造物者と云ふを取り用ひ、彼が説を基として云ひ誇る洋学の徒の多かるは、如何ぞや。本末を紊るの僻学と云ひつ可し。初学の徒、よく心すべくこそ。故、西夷学の上に
は、数々弁論することあり。ことに『蕃学弁妄』と云ふ書を著はして、微細にわきまふべくなむ。

右の文章から、その書は、キリスト教への批判を含むものであったかと思われる。しかし、『蕃学弁妄』は出来したのか否か、残念ながら現在のところ、それらは全く不明である。

おわりに

以上の考察によって、明らかにになったことを要約すると、次のようになる。

①『大帝国論』執筆の当面の目的は、ドイツが「正統の帝国」ではないということ、歴史的に証明することにある。それは、結果的に、日本以外には「正統の帝国」が存在しないことを証明することでもあり、それによって、

正胤は、国学的な世界観の再構築という、時代の課題にも応えようとしたのである。

②『大帝国論』の思想的な背景としては、以下のものが考えられる。

(平田篤胤) 篤胤の学問思想からは、天皇大君論と積極的な洋学摂取の姿勢とに、最も強い影響を受けている。

(大国隆正) 隆正の学問思想の中からは、天皇総帝論と紀年法との影響を受けている。

(水戸学) 『新論』を通じて、水戸学的な正名論の影響を受けている。また、水戸学の歴史記述の方法についても影響を受けている。

(竹尾家) 祖父・正頼以来、竹尾家には洋学に対する関心が高く、正頼からは、その洋学観を継承している。

無論、これらは、現在の時点で、筆者が気付き、文献的に実証できる範囲内での結論に過ぎない。⁽⁴¹⁾

なお、以上のような結果から、次のようなことも考えられる。すなわち、正胤は、一般には平田派の国学者と認識されているが、実際には、隆正をはじめ平田派以外の、複数の学派的・思想的な影響を強く受けており、したがって、今日、一般にいわれる平田派・大国派の区別なども、正胤の意識においては、さほど重要なものではなかったのではないかと、ということである。かつて源了圓氏は、幕末の志士達を、「いちいち、しいてなにかの学派に所属せしめることは、さほど意味がないであろう」と記されて⁽⁴²⁾いる。これは、志士達に限らず、当時の、かなり多くの知識人達にも、妥当する見解ではないかと思われる。

しかし、いまだに学界には、学派や学統による表面的な分類を過信するあまり、その分類によって、ある人物の学問思想の性格まで、規定しようとする向きもある。学派や学統から人物の学問思想を規定するのではなく、本来は、個々の人物の学問思想の具体的な分析を通じて、それらの集合体としての学派や学統の性格が、規定されるべきであろう。そのためにも、今後の幕末国学の研究においては、より多くの著述を詳細に分析し、そこに内在する思想の系統を、実証的に解明していく必要がある。学派や学統は、そのような作業によって確認されてのち、はじめて、思想的に意義のある概念になるのではなからうか。

なお、本稿では、『大帝国論』に関する以外の正胤の学問思想には、ほとんど触れていないが、このうち、神職論、政治思想などについては、すでに別稿に記しているので、参照してもらいたい。⁽⁴³⁾ また、本稿では、『大帝国論』の書誌学的な問題にも、ほとんど触れていないが、その問題に関する検討は、後日、稿を改めて行いたいと思う。

注

- (1) 『平田篤胤』(新潮社・昭和一八年)。
- (2) 『日本思想大系五一「国学運動の思想」』(岩波書店・昭和四六年)。
- (3) 田崎哲郎氏著『地方知識人の形成』(名著出版・平成二年) 一一七頁。
- (4) 平田篤胤の書簡、草鹿砥宣隆の序文(前掲『国学運動の思想』四八八―九頁) 参照。
- (5) (一) 内の数字は、前掲『国学運動の思想』の該当箇所頁数を意味する。
- (6) 岸野俊彦氏「三河平田派国学者 竹尾正靱・正寛・正胤覚書」(『名古屋自由学院短期大学研究紀要』第一一号・昭和五四年)、前掲『地方知識人の形成』、参照。
- (7) 『誓詞帳』・『門人姓名録』によれば、正寛の篤胤への入門は、文政一〇年である(『新修・平田篤胤全集』別巻三〇頁・二六五頁)。
- (8) 『非葛花卉』(西尾市立図書館所蔵)。

- (9) 塚本学氏・新井喜久男氏著『愛知県の歴史』（山川出版・昭和四五年）には、「平田門下の国学者竹尾正胤」（二〇三頁）とあり、神社本庁教学研究室編『平田篤胤の神道観』（神社本庁・昭和四九年）にも、「篤胤の国体観は（中略）その門下竹尾正胤によりがえった。」（二四頁）とある。
- (10) 前掲『門人姓名録』によれば、正胤は、明治五年の朝日社神官・菅沼真澄の気吹舎への入門に際し、その紹介者となっている（『新修・平田篤胤全集』別巻四九〇頁）。
- (11) 『靈能真柱』（『新修・平田篤胤全集』第七卷九三頁）。
- (12) 『講本伊吹於呂志』（『新修・平田篤胤全集』第一五卷 一五六頁）。
- (13) 『非葛花弁付録』（西尾市立図書館所蔵）。
- (14) 岸野俊彦氏は、『大帝国論』執筆の思想的な背景に、「万物満足」という自己意識の「崩壊」がある（幕末維新期における平田学の特質―「草葬」竹尾生胤を中心に―）（『思想と文化』1・昭和五四年）と記されているが、この見解は成り立ちがたい。他ならぬ『大帝国論』に、交易無用論が展開されているからである。
- (15) 『新修・平田篤胤全集』第八卷 六一頁。
- (16) 同右。
- (17) 『魯叟孔丘弁』（豊橋市立図書館所蔵）。
- (18) 拙稿『大國隆正の天皇総帝論』（『皇學館史學』第七・八合併号・平成五年）参照。
- (19) 野村伝四郎氏編『大國隆正全集』第一卷 九〇頁。
- (20) 同右 一七頁。
- (21) 『天朝大帝國論稿』（豊橋市立図書館所蔵）。なお、外題には『天朝大帝國論』とある。
- (22) 谷省吾氏著『平田篤胤の著述目録 研究と覆刻』（皇學館大學出版部・昭和五一年）六〇頁。
- (23) 前掲『大國隆正全集』第一卷一三九―四〇頁。
- (24) 『神威鑿狄考』（豊橋市立図書館所蔵）。
- (25) 前掲『地方知識人の形成』二二〇―一頁、参照。
- (26) 今井三郎氏・瀬谷義彦氏・尾藤正英氏校注『日本思想大系五三『水戸学』』（岩波書店・昭和四八年）三九六頁。

(27) 同右。

(28) なお、篤胤の『西籍概言』には、「凡テ外国ノ王ヲ尊デ、天子ダノ、皇帝ナドトハ、仮ニモ云ベキ事デハ无イデゴザル。

(中略) 御国ノ人ハ、タダ、モロコシノ王トカ、天竺ノ王トカ云ガ、ホントウノ事デゴザル。」(『新修・平田篤胤全集』第一〇卷一―三―四頁)とある。この場合は、「モロコシ」・「天竺」のみを対象としていること、外国の君主を「王」と呼んで敬意を払っていること、などの点で、正胤の主張とは相違するが、このような思想の影響下にあったことが、後に正胤が『新論』の主張に共鳴し、影響を受ける基盤になっていると考えられる。

(29) 前掲『水戸学』三九八頁。

(30) 同右。

(31) 『桑田記聞』(豊橋市立図書館所蔵)所収。

(32) 前掲『地方知識人の形成』の「西洋関係引用書名」(一一八頁)には、他に『物理小識』の書名も見えるが、この書は、漢籍の範疇に属するものと判断し、ここには記していない。

(33) 前掲『国学運動の思想』四八七頁。

(34) 前掲『地方知識人の形成』一一八頁。

(35) 伊東多三郎氏著『近世史の研究』第二冊(吉川弘文館・昭和五七年)三五四頁。

(36) 『祭事究論』(豊橋市立図書館所蔵)。

(37) 前掲『三河平田派国学者 竹尾正範・正寛・正胤覚書』。

(38) 前掲『地方知識人の形成』一一八頁。

(39) 前掲『国学運動の思想』五〇九頁。

(40) 他にも、前掲『国学運動の思想』の頭注には、疑問とすべきものがある。例えば、『非葛花弁』の頭注には、「竹尾正寛と正胤の共著、五巻。本居宣長著『非葛』を非難した本。」(五〇九頁)とあるが、『非葛花弁』は正胤の単著であり、『非葛花弁付録』が、正寛との共著である。また、その内容は、『葛花』を批判しているものではなく、『葛花』を批判した『非葛花』を批判しているものである。さらに、巻頭の部分で、「水戸の会沢伯民は、」として、正胤が引用しているのは、本稿の本文にも記しているように『新論』であり、「迪舞篇」(四九〇頁)ではない。

- (41) 山本七平氏は、山崎闇斎の学問思想に『大帝国論』の「萌芽」がある（山本七平氏・大濱徹也氏共著『近代日本の虚像と実像』〔同成社・昭和五八年〕二七頁）とされている。巨視的な視野からの興味深い指摘であり、今後、検討すべき問題の一つではあろう。
- (42) 源了圓氏著『徳川思想小史』（中央公論社・昭和四八年）二一四頁。
- (43) 拙稿「竹尾正胤の神職本義論稿」（『皇学館大学紀要』第三十一輯・平成五年）、同「幕末国学者の変革思想」（『季刊日本思想史』第四三号・平成六年）。